かわいいひと　side A

橘高　有紀

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
かわいいひと　ｓｉｄｅ　Ａ

【Ｎコード】
Ｎ２３１０Ｉ

【作者名】
橘高　有紀

【あらすじ】
私の彼氏は指がキレイ。そして中身も超可憐！　世界で一番かわいくて、愛しい人なのです。

席で偶然隣り合って、私は彼に出会った。いや、顔にぼんやり覚えはあったけど、隣同士になって初めてズキューン！　と心に来るものもあるのです。そう、私は彼に一目惚れしてしまったのだ。

「っかー、もうたまんねっすよ、涼歌ちゃん！　あの節の目立たない大きな手！　白くてきめ細かな肌、長くてキレイな形の指！　最高なのはねぇ、爪ですよ、爪。完璧なんすよ。へらみたいじゃなくて、縦長の楕円形でね？　あんた手入れしてんでしょってぐらい表面も滑らかで、色もキレイなピンク色！　本当に男の手なの！？　って思うぐらい」

「はいはいはい。トキメキは十分わかったから、酔っ払い親父のノリで彼氏語るのはやめなさい。いや、あんたが語ってるのは男の手だけど」

ランチを一緒している涼歌ちゃんが、ぱたぱたと手を振った。その手をがしっと、両手で包んだのはもちろん私。

「だいじょうぶ。涼歌ちゃんの手も好みであります。この小さくてほっそりした指と、豪華に飾られた爪は鑑賞に値します」

ひた、と見つめて告白すれば、涼歌ちゃんは空いてるほうの手でペシと私を叩いた。

「手ぇ放してくれないと食べられないでしょ。つーか、ちゃっちゃと食べなさい。ちんたら話してたら講義始まるでしょうが」

しぶしぶ、ネイルアートで彩られた手を手放せば、涼歌ちゃんは半眼になってため息をこぼす。フォークでつんつん皿をつついて、パスタをくるくる回しながら、

「あんたの話聞いてると、中川君が哀れに思えてくるんだけど。手で選びました宣言された日にゃ……」

「別に手だけだなんて言ってないですよ。平ちゃんは中身も十分可憐なのです」
「可憐とか言わない。中川君、そのうち泣くよ？」
そうかなぁ……？
私もパスタを取り分け、くるくるフォークを回した。そうかなぁ？　可憐って言葉悪い意味になるかなぁ？　だって平ちゃん（中川心平というのですよ）見てたら、誰だって同じように思わないかなぁ？
「中川君って言ったら、背も高いしカッコいいじゃない。最近コンタクトにしてさ、一気に注目の的って感じ。やさしいし、人当たりソフトだし。前は全然目立たなかったのに」
涼歌ちゃんの意見に、平ちゃんの姿を想像してみた。そこらの男子と変わらんよーな気がするんだけど。そうだなぁ、あえて言うなら好青年って感じ？　声のトーンなんて気持ちいくて、手つなぐだけで真っ赤になるのが可愛いよ。
私がいつだったか、平ちゃんの指にキスしてなめちゃったときなんて、飛び上がって逃げていたよ。口数が少なくても、態度で全部わかっちゃうような人なんだよねぇ。……カッコいい……のかなぁ？　可愛い人って言葉が平ちゃんほど似合う人はいないと思うのに。
「まぁ、指フェチのあんたにゃわからんかもしれんけどぉ」
私の疑いを察したのか、涼歌ちゃんは頬杖ついて傍観者モードだ。そうしていると涼歌ちゃんって色っぽい。茶色に染めたふわん、とした髪が胸元を流れてドキッとしちゃう。この日当たりのよい席にいるだけで、ドラマのワンシーンみたく映っちゃうんだから不思議。
ぼんやり見惚れていたら、涼歌ちゃんは着信を告げる携帯を取り出した。そうしてサッと顔色を変える。
「ごめん、約束あったの忘れてた！　お金ここに置いとくね」
慌しくバッグをつかんだ彼女に、私は言ってやる。
「今日は彼氏A？　B？　C？」
「ふふ、残念。彼氏Dです。――途中退場ごめんね。また今度埋め

合わせするから」
隙のない麗しいお顔で微笑まれたら、怒る気なんて失せちゃう。私が男だったら、間違いなく落ちてるはず。彼氏Eでございます。にこにこ顔で手を振る私を、不意に涼歌ちゃんが見下ろした。少し表情を曇らせて。
「七音（ななと）、うかうかしてたら中川君、盗られちゃうよ。あんたが思う以上に、彼狙っている子いるからね」

彼狙ってる子、いるからね。

ファミレスを出て、セミの煩い大通りをぽたぽた歩いた。頭の中を涼歌ちゃんの台詞にぐーるぐーる支配されながら。
背も高くて、カッコいい。注目される。やさしいし、人当たり柔らか。……平ちゃんってそんな人？　もっと、こう、頼りない感じなんだけど……。
恋に落ちたきっかけは、あの繊細な指だった。容姿も性格も吹っ飛ばしてソコしか見えていなかった。思わずガシッとつかんで「私と付き合ってもらえませんか！？」なんて即行で（講義中に）告白したんだ。あんな理想的な形の手、見たことがなかったから。だって手のモデルみたいなの！
返事は、狼狽して戸惑いまくった挙句に、うん、と頷いたものだった。
でもね、付き合っているうちに、彼の中身も好きになった。どうしようもなく可愛い人なのだ。人見知りをするのか、マトモな会話ができるようになるまで一月以上。キスだけで三ヶ月もかかった人だ。手を繋ぐのでさえ真っ赤になって未だに避ける。
……涼歌ちゃんが言ってたのって本当に平ちゃん？
別の人から見ればそんな風に映るの？　それとも私が勝手に「可愛い人だ！」って思い込んでいる？

……あれ。
あれれ？
嫌な事実に気づいて、校門が過ぎたあたりで私の足は止まった。笑顔が固まっていく。もしかして私……好きとか言ってもらったことない、かも。いや、平ちゃんが私に触れてきたことさえ、なくない、か？
いつも押し倒しているのは私だったから気にしたことなかったけど――あれ？　私、彼女なはずだよね？　え？　実は違ったりする？　私の勢いづいた告白に、思わず頷いちゃったとか！？
一度考え出したら、この暗い思考は止められなかった。足がふらりと動いても、ぐるぐる脳裏を占めている。
最初、まともに口利いてくれなかったのって、もしかして嫌がってた？　そういえば目線さえなかなか合わせてくれなかった気がするよ。無理やり付きまとって、喋らせてた？　触れてくれないのは、好きだと言ってくれないのは、そのせいか！？
ぴしゃーん！！　とばかりに雷が落ちたような気分になった。
いやぁ、もう、笑っちゃうぐらいビンゴっぽくないっすか、これ。つーかヤバくないっすか！？　うわ、どうしよう。どうしたらいいんだろ、こんなとき。てか付き合って三ヶ月もたって気付く事実ですか！？
お、落ち着くんだ七音。深呼吸してー……恋愛マスター涼歌ちゃんに、相談だ。

――ただいま電話に出ることができませ

『ん』が聞こえる前に携帯を切った。
「……」
っふ。そうだよね、デートだもんね！？　もう彼氏Dと会っていちゃいちゃしてるよね！？　ぐあああ、誰にこんなこと相談したらいいんですか！？　いや待て。きっとこんなの、ただの被害妄想に

過ぎないですよ。涼歌ちゃんだってきっとそう言ってくれるはず！
なんて思って学校歩いたら、聞こえたんだな。「好きです」って声が。
どっきーん、と心臓は当然跳ねましたさ。だって告白だよ！？
自分に言われたんじゃないけど、やっぱドキドキですよ！？　どうしよう。ここを通り抜けたかったのに引き返すか。まったく……告白するなら人気ない場所選んで欲しい。うっかり聞いちゃったら照れるんだ！
そう視線を巡らせたとき、再度私は凍り付いちゃったんだな。……だって、告白を受けてる相手が……平ちゃんだったから。
嘘でしょ！？
思わず隠れてしまった。平ちゃん、今って講義じゃないの！？
どくん、どくん、と心臓の音に邪魔されて、会話が聞き取れない。
どうしよう、近づくか、近づくまいか。ごくん、と生唾を飲み込んだ。汗で、手とか背中とか、気持ち悪い。緊張に気持ちが高ぶって、どうにかなってしまいそう。
――平ちゃん、断って。付き合っている彼女がいるからって言って！
祈るように瞼を閉じた。だがそっと目を開けた瞬間、平ちゃんが女の子の肩に両手を置いているのが、見えた。私には、触れようともしない平ちゃんが。
あの、大好きな手で。
すごい真剣な顔で。
――まさか、キス、する直前……？
目の前が真っ暗になった。知らず踏み出していた足が、石か何かに当たる。二人が驚いたようにこっちを見た。沈黙が落ちる中、平ちゃんが「ナナ、これは――」なんて言った。だけど、「あ、あはははは！？」なんて笑い声で遮った私はバカでしょうか。びっくりしている平ちゃんに、くるりと背を向けた。呼び止める声が聞こえたけど、立ち止まる余裕なんかなかったですよ。

夜中になってズキズキ痛み出した胸を押さえた。こんなに時間が経ってから涙が溢れてくるなんて、どうかしちゃってる。ボロボロ泣くほど、ショックだったなんて。
「どうして、こんな、苦し……」
バカだ、七音。こんなに真剣に、平ちゃんを好きになってたって今頃気づくのか。手だけじゃなかった。平ちゃんが、私、大好きだったんだ……

翌朝、鬱な気分で学校に行ったら、涼歌ちゃんがあんぐりあごを落としてた。ああ、美人なのに台無しですね……。
「七音、どうしたの？　象に踏まれたパンみたいなその顔は」
おはようもなしに、涼歌ちゃんは開口一番そんなことを言う。
「うるさいですよ。ちょっと血の巡りが悪いだけで、マッサージしたら戻りますよ」
まさか夜中泣いてました、なんて言えるわけない。それっきり無言で席に着いて、講義の準備にかかった。今日は、平ちゃんに会えない日だ。講義が互いに重ならない。オマケに朝は平ちゃんが学校へ来ない。その事実にホッとした。
「ねぇ、昨日あれから何かあった？　電話くれてたよね。夜にかけたけど、あんた出ないしさ」
「別に、大したことは……現実を知っちゃって凹みまくってるだけで」
勘が鋭い涼歌ちゃんに、ぽとりと本音を落とす。彼女は「は？」なんて言ったけど、これ以上口にするのも嫌だ。
「え、なぁに？　本気で落ち込んでない？」
「私だって、落ち込むときぐらいあるっすよ」
言って、ペンを握り締めた。憂鬱は晴れないけど、今はそっとし

ておいてもらいたいのだ。
隣で涼歌ちゃんは携帯をまた触っている。今度は何番目の彼氏に連絡取ってんだろう。……どうでもいい、けど……ね。ため息は止め処なくあふれ出た。
講義内容は右から左に抜けていく中、考えるのは平ちゃんのことばかりだ。平ちゃんに撫でてもらいたい。あの手で頬に触れて欲しい。……会いたい。
会いたいはずなのに、平ちゃんと会うのが恐かった。こんなことって、本当、どうかしてるよ……

「昨日の埋め合わせするから、明日出てらっしゃいよ」
涼歌ちゃんが唐突にそんなことを言い出したのは、学校を出る直前だった。講義中にふらりと姿を消したから、先に帰ったんだと思ったのは内緒です。（だって彼氏ＡＢＣＤといるらしいし。）
「涼歌ちゃん、気にしなくていいですよ。あの後私もすぐお店出たし」
「何言ってんの。あんた、私と離れてから落ち込んでんでしょ？気晴らししましょーってんだから来なさい。じゃあ夕方五時半に河原橋で。来ないと風月堂のパフェおごりだかんね」
絶対来なさいよ！　としぶる私に念を押す彼女。時々、涼歌ちゃんって強引だ。こっちの気持ちや予定もお構いナシに約束取り付けてくる。女王さま気質って言うのかな。
明日、平ちゃんと会う予定、あったけど……
お祭り、一緒に行こうねって約束。ずっとずっと楽しみにしてた。でも今、会うの恐い。平ちゃんが別れを切り出してこないか、恐い。別の子が好きって言われたら――
昨日からずっとオフにしている携帯は、翌日、涼歌ちゃんとの待ち合わせまでオンにすることはなかった。
平ちゃんと私を結ぶはずのツールがこんなに重たいなんて、初め

て知ったのだ。

絶対来なさい――その言葉の通り、パッとしない出で立ちで私は待ち合わせまでやってきた。気分はやっぱりブルーです。橋の上では大勢に紛れて、浴衣姿の女の子がちらほら。……本当なら、私も浴衣を着る予定だったのですよ……。

目が追いかけるのは、幸せそうに笑う女の子たち。その隣にはほぼ男の子がいて、ああ、デートなんすね！？　聞かなくてもわかります、そのピンクオーラ！　ふふんだ、こっちも美人の涼歌ちゃんとおデートです。別に羨ましくなんか、ないですよ！？　羨ましくなんか……

「いた、ナナ！」

後ろからかけられた声に、ぎくん、と肩が弾んだ。この、声は――！

振り返りもせず、ダッシュです。だって、この声は平ちゃんだ！

慌てて携帯をオンにして涼歌ちゃんに電話した。待ち合わせに変更をお願いしないと！　でも繋がったと同時に聞こえてきたのは、勝ち誇ったような笑い声。

『ちゃーんと中川君に会えたでしょうね』

なんていわれた日にゃ、思わず携帯握りつぶしかけたですよ。はめ　ら　れ　た　！　後ろからは、ナナ、と呼び声。嫌ですよ。私、平ちゃんと別れるの、嫌ですから！

『いい機会なんだから、あんたちゃんと中川君と話しなさいよ。このおバカ』

「お、おおおおバカって何ですか！　おバカって」

『恋愛は一方的にするものじゃないの。だから、隙ができるのよ。彼女がいるって言っても諦めない輩が出てくるの。わかる！？』

我武者羅に走りながら、唇を噛んだ。隙とかそんなの考えたことなかった。だって、私は確かに平ちゃんが好きなのだ。それ以上に

何が必要？　何が足りない？
人ごみが邪魔をする。行く手をふさぐ。どうして今日が祭りなの。ぜぇはぁ言いながら振り返れば、真っ直ぐにこちらを目指す平ちゃんがいる。――どうしてこの人ごみで、私を見つけられるの。
「ナナ！」
声と同時に、腕をつかまれた。二の腕だって一掴みにする、大きな手に。
「一昨日のことだけど」
「き、聞きたくないです！」
両耳をふさいで、目を閉じた。聞きたくないです、と首を振りながら背中を向けた。うわ、どうしよう。平ちゃんを前にしたら、身体、震えちゃってる。うわ、うわ、涙まで出てきちゃうよ！？　頭の中までぐちゃぐちゃで、どうしたらいいのかわかんない――
ぐい、と強引に引っ張られた。倒れかけた私を支えるのは、人の温もり。汗ばんだ肌と、走って切れた息遣い。どくどく聞こえてくる鼓動は、私以外の。
抱きしめられて、いた。あんなに望んでいたのに、今このときに。
「は、放してください！」
ぐぐぐ、と腕を立てて必死に抵抗しなきゃいけないのが辛い。放して、と喚けば、上からふ、と笑う声。
「一昨日のあれは……これと同じだよ」
目にいっぱい涙をためたまま、思わず顔をあげた。そこにあるのは、やさしい微笑。でも、傷ついたような。
「抱きつかれたから、引き剥がした。でもそこ、ナナが見てて。すごい悲しそうだったからヤバいなって思ったけど、逃げるし、携帯繋がらないし」
へ、と瞬いた。とても困った、と笑う彼の笑顔が曇っている。
「やっと捕まえた。怒っているんだろうけど、追いかけてごめん。ただ、誤解されたままなのは嫌だったから」
私から離れていく手を思わずつかんだ。彼の右手を、両手で。

涼歌ちゃんの台詞が耳に響く。恋愛は一方的にするものじゃないって奴。なにこれ、私、すごい空回りしてる。
「私、怒ってなんか、ないですよ。私、私が逃げたのは、平ちゃんと別れたくなかったからっ。お別れを、切り出されるんじゃないかって……恐くて」
それだけ言うと、後は声にならなかった。平ちゃんの手だけは放さずに、わんわん泣いた。往来で大泣きしたので、平ちゃんがおろおろしていた。必死になだめようとして、でも頓珍漢なこと言って訳わかんない。結局、平ちゃんに引っ張られるまま、私たちはその場から消えた。
そう、私が大好きなのは、この平ちゃんです。
不器用で、やさしくて、照れ屋で、かわいい人なのです。

祭りのやぐらから少し離れて、人気のない草むらで私たちは話をした。文字通り向かい合っての話し合いだ。（なぜか平ちゃんは正座スタイルで。そういうとこも謎です……。）祭りの熱気は、ここからじゃ少し遠い。そんな中、素っ頓狂な声を私は出した。だって、明かされた真実は予想もしてなかったから。
「ええ！？　じゃあ、じゃあ平ちゃん、狙って私の隣の席に？」
平ちゃんは顔中赤く染めながら、ぼそぼそ喋った。いわく、私のことを前々から好きでいてくれたこと。近づきたくて、講義が同じ時はいつも近くの席を取っていたこと。でも私はまったく平ちゃんを眼中に入れてなかったこと。気を利かせてくれた涼歌ちゃんが席を空けてくれたこと。
そして私からの告白が真剣に嬉しかったこと。
でも、私は平ちゃんの手ばかりが大好きで、平ちゃん自身へなかなか目を向けなかった。平ちゃん自身も、自信のなさから目を合わすことさえ最初はできなかった。―（自信溢れてるなら、私が気付く前に告白してくれたですね……）

だから平ちゃんは自分に自信をつけるために、私の意識が手以外にも向かうように――努力をしていたそうな。メガネをやめて、ぼさぼさ頭をやめて、服装も意識して。
「でも、そんなとこ一切見てくれてなかったけど。いつも手ばっかで」
ひらひら、と苦笑して平ちゃんは手を振った。ナナ、と呼ぶようになってくれたのも、そういえば最近になってからだ。私はそんな彼の努力とは違った――変わらない中身をずっと見ていた。それも、私からのリアクションばかりを一方的に。
申し開きの言葉もございません、はい。
平ちゃんの努力は私を除いて実りまくり、たまに告白されるのだ、と言った。ううう、と罰が悪そうに小声で。
「でも待った。……じゃあなんで、平ちゃん、私に触らないですか」
すると、平ちゃんは盛大に目線をそらした。なんでやねん。なんでそこで目ぇそらすねん。
「へ・い・ちゃ・ん・？」
ハートマーク付けて無理やり視界に入ってやると、また別のほうを見る。待てコラ。
「平ちゃーん、どうして目線そらすのですか～？」
ずい、とさらに顔を近づけると、近づいた分だけじりじり逃げていく。一定間隔をあけて、私を近づけさせないつもりか？
「……どうして逃げるのですか」
「あ、暑いでしょ、くっついたら！」
言い訳になってない！　腹が立って平ちゃんを押し倒した。さあ言え、と馬乗りになって脅しつけたのだ。そこでも顔を逸らすか！？　意地でも視界に入ってやれば、堪りかねたように平ちゃんが叫んだ。
「わかったからナナ、上着着て、上着！」
「……なんでですか」
この暑いのに、上着なんて。キャミで十分じゃないですか。

すると、平ちゃんは顔を背けながら、「……押し倒したく、なる、から」
耳まで赤く染めて、平ちゃんはぷるぷると震えた。その言葉にせずとも伝わってきそうな「嫌わないで、嫌わないで！」という主張に力が、抜けていく。だから、抱きつくたびわーわー騒いでたとか？　指なめて、飛ぶように逃げたとか？　ああ、そういやこの姿勢だったら、胸元丸見えです、ね……確かに。
ふ、と笑いがこみ上げた。くすくす笑えば、「……ナナ？」と、様子をうかがうようにむくりと彼は身を起こす。
本当に、この人はどれだけ可愛いんだろう。
「いいよって言ったら？」
私の顔も、今、きっと真っ赤です。平ちゃんの大きな手を取って胸に押し当てた。キレイな手に触れられてる、と思うと心臓が口から飛び出しそうだ。仰天したのは平ちゃんだ。
「な、ナナ！？　何す――」
「ドキドキ言ってるの、わかるですか？　これ、嫌だからこんなドキドキしてるんじゃないですよ。平ちゃんの手だから、こんななのですよ」
平ちゃんが怯えた犬のような顔でこっちを見る。そしてもう片方の手で、私の頬に触れる。唇が、重なる――

「って、涼歌ちゃん！　見世物じゃないですよ！？」
言って手近にあった小石を茂みに向かって投げた。運良くヒットしたのか「あいた」なんて悲鳴がきこえてくる。そこから出てきたのは、違わず美人の涼歌ちゃんだ。浴衣姿が色っぽい。
「ああん、もう。いいとこなんだからぁ、遠慮せずチューしちゃえばいいのに」
「人に見せびらかす趣味はないです！　というか、いつから」

「ほぼ最初から。だって、あんたがまた暴走しないか心配してたのよ」
「そしてデバガメ……。余計なお世話って言葉知ってますか！？しかも開き直り！？」
「まぁまぁ。私の計らいでうまくいったわけでしょう？　感謝なさい？」
「まぁまぁ、じゃないです！　涼歌ちゃんは大体いつも――」
どうどう、と押さえにかかる平ちゃん。ええい、放すのです！私は馬じゃありませんよ！？
そしてタイミングよく鳴り響く携帯。ジェスチャーと目で黙りなさい、と命令する涼歌ちゃん。
「それじゃあ、彼氏Aと待ち合わせしてるから。ごゆっくりね」
「早くいっちまえ、ですよ！」
やぐらの方に消える彼女をしっし、と追い立ててみれば、再びしんとした空気。後には私を押さえる平ちゃんと私の二人きり――
「うひゃぁう！？」
変な悲鳴を上げたのは私だった。だってね、平ちゃんがくんかくんか匂いをかいでるのですよ！　いやあああ、さっきの全力疾走で汗かいたのに！　ってそうじゃない。それだけじゃない。『押さえ込む』という名目で私の胸を触ったのは、形のよい手だ。というか、後ろから抱きしめられてる状態ですかこれ！
ぼかん、と湯気が頭から出るかと思った。今さらながらに照れまくってしまう。待って、待って、ストップ！　理性飛びそう。どうして？　私から抱きつくのは全然平気なのに。背中が、平ちゃんとくっついている箇所が、触れられてる部分がどうにかなってしまいそう。あんなに避けられてた平ちゃんに、あのキレイな手に――
でも平ちゃんはパッと身を離した。「それじゃ、俺たちも行こっか」なぁんて言いながら、赤い光のほうへ、祭囃子の聞こえるやぐらのほうへ、スタスタ歩いていく。ちょっと、このタイミングでそれですか！？　き、期待した私っていったい！？　平ちゃん、と追

いかけて軽くにらんだ。すると彼はにへら、と笑みを広げる。
「手だけじゃない、みたいだし」
なんつって自分の両手を眺める平ちゃん。心底嬉しかったのか、締りのないお顔だ。そんな幸せ〜〜って顔されたら、何も言えなくなるじゃないですか。
……しょうがない、なぁ。こういうところもひっくるめて、好きになっちゃったんだもの。
あの手に触れてもらったのか……とリフレインしかけた私は、ふと平ちゃんの左手をつかんだ。
「あああああ！？　ちょっと平ちゃん、手に傷！　傷ができてる！！　うそ！？　いつの間に！？　平ちゃんの手に傷がー！」
「え？　あ。本当だ。草で切ったかな……ってナナ、何してんの！？」
声を裏返すような悲鳴、あげなくてもいいですよ。かぷ、と平ちゃんの手を軽く噛むようにしてなめただけなのに。
消毒です。必要です。血の味が広がって不思議な感じがします。すると、平ちゃんはぷるぷる震えながらフリーズした。心なしかなみだ目だ。舌を動かすと、「うわぁ！？」なんっつって飛び跳ねた。さっきまでの余裕はどこへいったのか。
「かわいい……」
思わずぽろっと零れた。すると平ちゃんは「あ」とか「うう」と言ってにじり下がり、やがてダー！　と逃げていく。その逃げっぷりはウサギのよう。
やっぱ、平ちゃんは、こうでなきゃ。
「平ちゃん、置いてかないで下さいっ」
追いかけて、腕を絡めると今にも目を回しそうな平ちゃんがいる。顔が自然と笑みを作ってしまった。
何度も言います。私の大好きな彼は、手がキレイで、世界で一番可愛い人なのです。

ときどき……かっこいいと思うけど、ね。

（後書き）

＊＊＊＊　＊＊＊＊＊　＊＊＊＊＊　＊＊＊＊

最後まで読んでくださって、ありがとうございました。
平ちゃん視点を書いた『かわいいひと　ｓｉｄｅ　Ｂ』もございますので、よろしければどうぞ！
ご意見ご感想をお待ちしております＾＾

橘高有紀

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2310i/

かわいいひと　side A

2010年10月8日14時30分発行